

華国鋒研究の概況と展望

はじめに

中華人民共和国政治の二つの転換点として一九七六年と一九七八年を掲げることができる。毛沢東は、一九七六年九月に死去するまで人民共和国の権力構造においてすべての重要事項の決定者であり、彼個人の力ですべての人の政治的運命を決定できた。これに対して一九七八年二月の「転換」は、毛沢東の「革命」の時代から鄧小平の「改革・開放」の時代への転換と理解されてきた。

この人民共和国期政治の二つの転換点としての一九七六年・一九七八年と、毛沢東の「革命」の時代から鄧小平の「改革・開放」の事態への転換としての一九七八年十一期三中全会とを媒介する人物として、華国鋒を掲げることができる。

華国鋒は、一九六九年の中共九全大会で中央委員、七三年の

十全大会で中央政治局委員に昇格、七五年の第四代期全人代で国務院副総理兼公安部長に就任した。その後、彼は七五年四月の天安門事件で党第一副主席・国務院総理、一〇月の四人組事件で党主席・党軍事委員会主席となり、結果、党・政・軍の権力を一身に担うことになった。これに対して十二全会（八二年九月）における党・政・軍の権力は、胡耀邦総書記、趙紫陽国務院総理、鄧小平軍事委員会主席である。このように四人組事件から十二全大会にいたる過程は、華国鋒政権から七八年一二月の十一期三中全会の「転換」を経て鄧小平政権に移行したとすることができる。

二〇一八年三月、筆者は、南開大学歴史学院において華国鋒研究の調査を行う機会を得た。大学図書館のデータベース「中文期刊全文庫」（維普）においてキーワード「華国鋒」として検索、ヒットした約一四〇〇篇から約七〇篇を抽出した。

田 中 仁

本稿はこれら関連研究を整理することによって、中国における華国鋒研究の概況とその展望を提示しようとするものである。

一・「歴史決議」と「華国鋒同志生平」

今日の中国政治における華国鋒の公的評価は、一九八一年六月の年中共六中全会「建国以来の党の若干の歴史問題についての決議」（歴史決議）であり、「一正四負」と概括される。すなわち：

華国鋒同志は江青反革命集団を粉砕する闘争で功績をたて、その後も有益な仕事をした「一正」。だが、華国鋒同志は「二つのすべて」（毛主席の決定したことはすべて断固として守らなければならず、毛主席のくだした指示はすべて終始変わることなく守らなければならない）というあやまった方針をとり、これをなかなか改めようとしなかった。一九七八年には混乱を收拾するうえで重要な意義をもつ「真理の基準」についての討論の展開をおさえた「一負」。また、古参の幹部を活動に復帰させる仕事や、歴史上の冤罪・でっちあげ・誤審事件の誤った決定を破棄する仕事を引き伸ばし、これを妨害した「二負」。さらに、以前からの個人崇拜を引き続き残すとともに、自分自身に対する個人崇拜までもつくり出し、それを受け入れた「三負」。…経済活動で功をあせ

りすぎたことや、そのほか一部の左よりの政策をとりつづけたことについても、華国鋒同志には責任がある「四負」。（歴史決議二五、韓鋼二〇一・一九）

蓋軍・中共中央党校教授は、一九七六年一〇月の四人組事件から七八年一二月の十一期三中全会にいたる「二年の徘徊」期の分岐は、①思想路線（实事求是か「二つのすべて」か）、②政治路線（経済建設中心か、「要を掴んで国を治める」のか）、③組織路線（迅速な幹部復活か、復活を遅らせ名誉回復を抑制するの）かであったとし、三中全会の意義は、①思想路線（思想解放、实事求是）、②政治路線の転換（建国以来の党史の大転換）、③改革開放の開幕、④鄧小平を核心とする中央指導集団の形成であると述べる「蓋軍一九九八」。

二〇〇八年八月二〇日の華国鋒死去に際して新華社が発信した「華国鋒同志生平」（『人民日報』九月一日）は「四負」に言及せず、彼が権力の核心にあった二年間については「二年の徘徊」とは異なる評価が提示された。すなわち：

一九七六年一〇月、華国鋒同志は葉劍英同志らとともに中央政治局を代表し、党と人民の意思を代表して果断な措置を断行し、一挙に四人組を粉砕して党を救い、社会主義事業を救済した。…四人組粉砕後、華国鋒同志は中共中央主席、中央軍事委員会主席、國務院総理などの職務を歴任した。この時期、彼は十期三中全会、十一大大会、十一期三中全会などの重要会議を主宰した。彼は、古参の無産階級革命家の支持のもと、混乱をしずめて正

常にもどし、党と国家の政治生活の正常な秩序を回復し、広範な幹部大衆を動員組織して経済建設の各工作に積極的に投入し、四人組の罪業を摘発批判して彼らの派閥組織を整理するうえで大きな成果を獲得した。彼は、広範な幹部大衆の要求にもとづき、冤罪・でっち上げの再調査と名誉回復に着手した。さらに彼は、万策を配しての経済発展を強調し、工業農業の比較的速度やかな回復と発展を獲得した。彼の提唱のもとで、教育科学文化工作は正常化し、外交工作においても新たな進展を獲得した。華国鋒同志は四人組の摘発を指導し、全党全国各族人民を動員して社会主義現代化強国を建設することに大いに努力した。(華国鋒同志生平)

華国鋒研究について、まとまったかたちで問題の所在と論点を提示しているのは、韓鋼・華東師範大学教授である。彼は、「華国鋒同志生平」での公的評価の変化について、イデオロギー評価を避け事実の点で概ね客観的に評価であるとし「韓鋼二〇一・九」、「一正四負」について次のように論じる。(1) 華国鋒は「四人組」拘束行動のすべてのステージの主導者であった。それは決してただ「功績があった」というものでは断じてなく「決定的な役割を果たした」のである。「二」。(2) 華国鋒が「二つのすべて」を堅持したと言う言い方は事実ではない。すくなくともそこに、鄧小平復活に反対するという意志は存在しなかった「一五」。(3) 老幹部の職場復帰と名誉回復を引き伸ばし阻んでいたことが華国鋒

の誤りと一つとされる。しかし具体的に見ればそのほとんどが汪東興についてであり、華国鋒については簡単に結論をだすことはできない「一五」。(4) 大規模な導入、西方視察の主張、輸出基地を作り外国借款に賛成すること、上部構造と管理体制の改革などは肯定すべきであり、華国鋒主政期に、改革開放はすでに日程に上っていた「韓鋼二〇一・二一②・一五」。

程中原・当代中国研究所元副所長は、「華国鋒同志生平」を「全面的かつ公正な評価」とし、残された問題は彼が鄧小平復活の阻止を意図して行ったのかという問題であるとする「程中原二〇〇九・七〇」。程は、(1) 四人組逮捕から七七年の三月工作会议の間、鄧小平復活問題について、華と陳雲・王震を代表とする党内の声との間で実質的な分岐はなく、ただ時機をどう捉えるのかという認識の相違であった「七二・七三」。(2) 華が鄧小平復活を遅らせた問題について、それが華の主観的意図であったかあるいは客観にそうなったのかは別にして、実際に合致したものであった。これは華の個人的専断ではなく、中央指導集団の決定であった。従ってこの問題で過度に個人の責任を追及すべきではない「七七」と述べる。

陳立旭・中共浙江省委党校主任は、「華国鋒同志生平」が彼の主催した三つの会議に高い評価を与えていることをふまえて、(1) 十期三中全会では政局を落ち着かせ全面的安定を実現した。(2) 十一全大会では文革終結を宣言し、現代

化建設の基本任務を確定した。(3) 十一期三中全会では党の工作の重点の移動を明確にし、改革開放を提起した、と概括する「陳立旭二〇一四」。

2. 天安門事件と権力の継承

中華人民共和国政治の転換点としての一九七六年は、一月に死去した周恩来と彼を追悼する天安門事件からはじまる。華国鋒は、この事件の過程で中共第一副主席兼総理となり、毛沢東の後継者としての地位を確立するが、その際、毛沢東が記した「あなたがやれば安心だ(你办事、我放心)」というメモ書きが決定的な意味をもったとされる。

李海文・中共党史研究室研究員(元文献研究室周恩来研究小組副组长)による「李海文二〇一六、二〇一六②、二〇一六③」は、従来の研究をふまえて天安門事件前後の政治過程について行き届いた叙述を行っている。すなわち、(1) 鄧小平第一副総理が推進した整頓政策を批判する「反右傾翻案風」に続いて、四つの現代化を提唱した周恩来が死去。四人組は周総理に対する人々の思いを弾圧したため、彼らは暗澹たる前途とともに生活改善の希望を持てなくなった。このことが、人々が「文革」に不満をもつようになった重要な原因であり天安門事件の根本原因だった「二〇一六・〇三四」。(2) 一九七五年九月、毛沢東の甥・毛遠新が主席連絡員となってから華国鋒は毛沢東と会うことが困難になっ

た。華は毛の指示があればそれに従って処理し、会議を開催するにすぎなかった「二〇一六・〇四七」。(3) 七六年四月四日の清明節には天安門広場に二〇〇万人が集まり、追悼活動が高揚した。夜、毛沢東の指示で開かれた政治局会議では広場の花輪の処理方法が議題となり、四人組による花輪の強制撤去が天安門事件の導火線となった。毛遠新による四人組と歩調をあわせた報告に対して、毛沢東は明確な意思表示をしなかった「二〇一六②」。(4) 四月七日朝、毛沢東は毛遠新に対して彼の考えを詳細に述べた。これを受けて政治局は、華国鋒を総理・党第一副主席とすること、天安門事件は「反革命事件」であること、鄧小平の職務剥奪・留党観察とすることを決定した「二〇一六②・〇五二・〇五三、二〇一六③・〇四八」。

毛沢東による華国鋒への後継指名として周知のメモ書き「あなたがやれば安心だ」について、徐慶全・炎黃春秋副総編輯は、次のように述べる。章含之(喬冠華夫人)、張玉鳳(毛沢東晩年の機要秘書)、中央文獻研究室『毛沢東伝』はいずれも、「あなたがやれば安心だ」(四月三日)のメモ書きが毛沢東による後継指名の根拠であるということに疑義を提出している。だがこれらの見解は、みな以下二点の史実を軽視している。第一の史実は、四月七日に毛沢東が華国鋒を念頭に「あなたがやれば安心だ」と述べていることであり、第二の史実は、四人組粉砕後にこのメモ書きが持ち出され、中央の指導者も全国の人民もこれが毛沢東による後継指名の根拠

とはならないとは誰も見なさなかった、ということである。

前者は毛沢東による「生前の後継指名」であり、後者は華国鋒の「宝刀」となった「徐慶全二〇一六」。

呉徳(朱元石整理)「一九七六年天安門事件的前前後後」は、天安門事件当時、政治局委員・北京市革命委员会主任として天安門広場の具体的状況を把握する立場にあった呉徳の口述『十年風雲紀事…我在北京工作的一些経歴』(当代中国出版社二〇〇四年)の摘録である「呉徳二〇〇四」。

三．四人組事件

「江燕二〇〇八」は、四人組事件に関するこれまでの関連研究を整理し、そこでの主たる論点を、(1) 誰が四人組問題の解決を提起したか(葉劍英か華国鋒か)、(2) 実行段階における華国鋒・楊劍英・李先念・汪東興のそれぞれの役割は何か(決定的役割を果たしたのは華国鋒か葉劍英か。汪東興はどのような役割を果たしたのか)を概括するとともに、方法面では史実の復元における口述資料・回想資料の用い方に言及、李先念伝編集組「一則重要考訂…有関華国鋒、李先念、葉劍英商談解決」四人組「問題の兩個關鍵時間」を有為な参照文献として掲げる。さらに、四人組事件研究の前提として、鄧小平による一九七五年整頓の成果と中断が、四五運動(天安門事件)から四人組粉砕＝文化大革命終結に対する十分な精神的物質的準備となったと述べる「程中原

二〇〇四」に言及する。

「韓鋼二〇一二」は、(1) 四人組の粉砕はまず華国鋒が提起した。それは李先念を経由して葉劍英に伝えられ、葉劍英の賛同を得た。(2) 汪東興は他に代えがたい役割を果たした。(3) 具体的方策として、政治局会議か中央委員会全体会議かが検討された(後者は造反派をふくむためリスクがあると判断された)。(4) 計画は、葉劍英を通じて指導者たちにあらかじめ伝えられていた、とする。

「程中原二〇一二」は、(1)「歴史決議」が述べるように、四人組粉砕は「文化大革命」と「歴史の新時期」との画期である。(2) 歴史評価は当時の歴史環境のなかで行われる。

歴史決議で汪東興が果たした役割への言及がないこと、新華社による葉劍英訃告(一九八六年一〇月二十九日)で「彼は決定的役割を果たした」とされたことは理解できる。(3) 毛沢東没後の華国鋒は、党と国家の最高指導者であった。彼は、葉劍英・李先念らとともに政治局の多くの同志と団結して四人組を粉砕し、ただちに政治局会議を開催してこれを通報し、しかるべく決定を行った。これは合法的行為であり、クーデタや軍事的陰謀ではない、と述べる。

四．「二年の徘徊」と「主政二年」

韓鋼は、中国最高指導者としての華国鋒のキャリアについて、在職期間としての一九七六年一〇月～八一年六月と権力

の核心にあった一九七六年一〇月～七八年一二月に区分する「韓鋼二〇一一・九」。後者の主政二年について、公式の見解では「二年の徘徊」とし、四人組粉碎にもかかわらず明確に改革・開放の方針をとることができなかったと理解される。

「南東風一九九五」はそうした見方をふまえてのものである。以下のように叙述される。(1) 四人組粉碎後の人々の願いは鄧小平の復活と天安門事件の名譽回復であったが、毛沢東晩年の左傾思想に忠実であった華国鋒は「二つのすべて」を提起し、これに同意しなかった。(2) 「二つのすべて」と実事求是の対抗は、「二つのすべて」を掲載した二七社論と鄧小平四月書簡、中共十一全大会での華国鋒政治報告と鄧小平閉幕詞の対抗に見られた。(3) 「真理の基準」についての論争では、一九七八年五月、「実践は真理を検証する唯一の基準」が中央党校『理論動態』に掲載、すぐに『光明日報』『人民日報』『解放軍報』が転載したのに対して、華国鋒と汪東興はこれを阻止しようとした。(4) 一一～一二月の中央工作会議で天安門事件の名譽回復が実現し、華国鋒も「二つのすべて」の誤りを認めた。こうして十一期三中全会は歴史的転換となった。

これに対して韓鋼は、「二年の徘徊」論とは異なる「主政二年」論を展開する。すなわち：

● 華が鄧小平復活を「阻んだ」ことはなく、一九七七年初め、鄧の再度の復活は時間の問題だった。鄧の再復活に一つのプロセスを経たことは華国鋒一人の意志で

はなく、高層の共通認識であった「韓鋼二〇一一・一二～一三」。

「二つのすべて」は鄧小平復活に焦点をあてたものではなく、鄧小平復活と天安門事件名譽回復についての社会輿論に焦点をあてたものであった。七七年三月の中央工作会議以降、華国鋒は「二つのすべて」を提起せず、公的な文獻、公的メディアも「二つのすべて」を提起しなくなっていた「韓鋼二〇一一・一三～一五」。

● 華は「真理の基準」は重要問題」であり「はつきりさせる必要がある」と認めていた。このことは、彼がこれについての討論を認めていただけではなく、何がしかの支持を与えていたことを示している「韓鋼二〇一一②・九～一〇」。

● 公的叙述では、「重点の移動」は文革後の歴史的転換であり、この戦略は鄧小平が「二つのすべて」との力較べの結果提出したとされるが、これは事実ではない。一九七八年冬、「重点の移動」問題で華と鄧には根本的な違いはなかった「韓鋼二〇一一・一七～一八」。

● 一九七八年一一～一二月の中央工作会議と十一期三中全会は、中共史上最も民主的な会議であった。だが華国鋒にとってそれは政治権力の「溶鉱炉」となった。意義深いのは、この結果は彼の包容性・寛容性と関係がある。二年間の乾坤逆転の原因は一つではないが、

主政者である華国鋒が重要な要因であったとせざるをえない。この経験は、ひとつの社会の深刻な変化と変容に必ずしも強力な政治指導者である必要はないことを示している〔韓鋼二〇一一②・一五―一六〕。

● 華が犯した最大の誤りは、一九七七年のいわゆる「反革命流言」に対する処置である。ただこの誤りの根源は華国鋒にあったのではなく、長期にわたる専政制度と伝統にあった〔韓鋼二〇一一②・一六―一七〕。

韓鋼は、中共史上、華国鋒は強い政治領袖とは言えないが、「主政二年」期の権力核心に、①毛沢東逝去後の最高権力の空白の補填、②華国鋒本人から鄧小平への権力移行、という変化があった。この経過を経て、中国国内における平穏と安定を保持、新たな激動の回避とともに深刻な社会変化・変容が始まったと述べる〔二〇一二②・三八〕。

五. 「主政二年」のとりえ方

以下の三篇は一九七六年一〇月から七八年二月にいたる華国鋒の「主政二年」について具体的な論述を行っている。

程美東・北京大学教授は、華国鋒「主政二年」時期の中国社会の変容を、当時の政治環境の観点から検討する。すなわち、(一)一九七六年九―一〇月、軍が文革否定を支持した中央の高級人員で老同志が絶対的優勢を占めたことによって、中国社会の政治勢力の非文革化・反文革化が明らかとなっ

た。(2) 国外の非毛化の議論と国内における文革批判情緒の拡大を背景に、華国鋒の統治には、最高指導者としての正統性を担保するため、伝統支配(毛の「あなたがやれば安心だ」)からカリスマ支配(英明な指導者と個人崇拜)さらに合法的支配(名誉回復とリクルート、経済発展)にいたる正統性資源の選択と治国政策の転換がみられた。(3) 西単民主の壁(一九七五年憲法の「大民主」)や広東から香港へのヒトの移動から看取されるように、社会統制が弛緩したことによって、中国は経済・政治・会の各領域で相対的に健康な軌道を歩んだ〔程美東二〇〇八〕。

楊宏雨・復旦大学教授らによる「中共十一大平議」は、(1) 四人組粉砕によって天下大乱から天下太治に向かうなかで、事実上、経済工作が党と国家の重点となった。(2) 中共十一全大会(一九七七年八月)の課題は、中央指導核心の空白を埋めること、文革終結後の中国の発展に向けて国家の政治生活を正常な軌道に乗せること、四つの近代化に沿った経済発展戦略を制定すること、内外の「非毛化」の議論に答えることにあった。(3) 十一大報告は文革時期の階級闘争を要とする思考モデルを突破し、欠陥はあるものの十二大報告に近い(十大、十一大、十二大の政治報告の使用語彙の分析による)、とする〔楊宏雨・周瑞瑞二〇一四〕。

李正華(当代中国研究所研究員)は、華国鋒と李先念が積極的に参与した一九七八年七―九月の國務院務虚会について、(1) 全党の仕事の重点を改革開放に移すために理論・

世論上での準備となった。(2) 参加者が自由に発言する形式は、以後の理論工作務虚会のモデルとなった。(3) 過度に即効的な成果を求める思想・影響は、十一期三中全会のあと採用される新八字方針「調整・改革・整頓・提高」方針の提出を促した、とする「李正華二〇一〇」。

六. 「真理の基準」論争

「徐慶全二〇〇八」は、一九七六年九月一〇月の毛沢東死去と四人組の命運の劇的終末によって三つの選択肢(①七七年二月七日の『人民日報』社論が提起した「二つのすべて」、②鄧小平や陳雲ら老革命家の「実践は真理を検証する唯一の基準」、そして西単民主の壁で魏京生らが提起した「第五の近代化」)が示された。七八年一一―一二月の中央工作会議と十一期三中全会は①と②の決戦であり、②の勝利に終わったと述べる「六四―六五」。

王東は、「真理の基準」論争の全体像を以下のように概括する。(1) この大討論は、一九七七年初めから七八年五月までの準備段階と七八年五月から一二月までの公開論争段階に区分できる。(2) 討論の推進者は三グループ(①鄧小平ら老世代のプロレタリア革命家、②胡耀邦ら第一線の指導的同志、③胡福明ら哲学者・理論工作者)で、鄧小平と胡耀邦の關係は歴史的に形成された総司令と先鋒の關係であった。(3) この大討論の意義は、①実事求是＝精髓論、②経済建

設重心論、③伝統的なソ連計画経済モデルを突破する体制改革論、④閉鎖状態を突破する対外開放論が確定したことである「王東二〇〇八」。

孫大力(中央党史研究室)は、(1) 一九五七年以後の毛の左傾の誤りから文革にいたる過程で、個人崇拜とともに党内の正常な民主生活が抑圧された。「二つのすべて」は天安门事件の名譽回復と鄧小平復帰に反対し、混乱は正工作に禁区を設置した。(2) 一九七七年四月の党中央宛書簡において鄧小平は「正しく全面的な毛沢東思想」に言及した。同年末、胡耀邦は二つの原則(①毛の指示を正しく全面的に理解する、②実践は路線の是非を検証する基準である)を提起した。(3) 十一期三中全会から六中全会を経て十二全大会にいたる時期は、混乱は正の全面発展と基本的完成の過程であった、と述べる「孫大力一九九〇」。

一九七七年三月、胡耀邦は中央党校副校長として党校の日常仕事を主宰することになったが、「真理の基準」論争に対する胡耀邦の関与について、次の三点を掲げることができる。(1) 一二月、校内で康生とその妻・曹軼欧による文革期の罪行(多くの冤罪を引き起こしたこと)に対する小字報が相次いだ。校党委は中央に両人の犯罪の事実を報告し審査を申請した。翌年一二月、中央党校と組織部(胡耀邦は中央組織部長に転出)は康生関連の冤罪者六〇三人のリストを作成、三中全会後「康生は林彪・四人組反革命集團の主要な成員」とする結論を得た「徐慶全二〇一五」。(2) 一九七七年九月

の中央党校開学式で葉劍英は「第九『劉少奇』、第十『林彪』、第十一回『四人組』の路線闘争の研究を提起した。これを受けて、胡耀邦は「三回路線闘争」專題研究小組を組織し、党史教学の新方案をまとめさせた。七八年一月の「關於研究第九次、第十次、第十一次路線闘争若干問題（草稿）」では劉少奇に対する「叛徒・内奸・工賊」の帽子がはずされた。さらに彼は「討論提要」作成して教職員による討論に付したが、この「討論提要」によって議論は全国に拡散した「徐慶全二〇一五」。(3) 一九七七年七月、胡耀邦は中央党校で『理論動態』を創刊、同誌第六〇期の「実践は真理を檢討する唯一の基準である」(七八年五月)は、「真理の基準」論争の全国的展開を促した「徐慶全二〇一五②」。

一九七八年五月「真理の基準」論争は公開論争の段階となるが、これに対して華国鋒は、「これは重要な問題である。論点を明確にし、団結の願望から出発して団結に達しなければならぬ」と述べ、抑制された寛容な態度をとった「胡德平二〇〇八、孟昭庚二〇一一」

七. 中央工作會議と十一期三中全会

中央工作會議（一九七八年一月一〇日～二月一三日）と十一期三中全会（二月一八日～二二日）に列席した著名な経済学者・于光遠は、(1) 二つの會議の關係は、工作會議が三中全会を準備し、前者での熱烈な討論に対する鄧小平

の総括が後者の基調となった。工作會議で提起された人事案件が三中全会で決定された。(2) 工作會議には、党政軍などの指導者、中国科学院・社会科学学院的代表、省級期間の指導者など二一九人が出席した。(3) 一月二五日、華国鋒は政治局常務委員會を代表して天安門事件の名譽回復を宣言した。(4) 會議の精神は、科学的指導、民主の發揚、改革の提倡、積極的な建設、寛容、団結であった、とする「于光遠一九九八」。

胡喬木（社会科学学院院长・國務院研究室主任）の秘書として工作會議と三中全会を目撃した朱佳木は、(1) 工作會議は議題が途中で変更され、歴史問題、中央指導幹部の誤り、真理の基準についての討論、人事問題などについて活発に議論された。(2) 工作會議開催直後の一月一三日、華国鋒は議事のコントロールを喪失し、結果、中央の主たる指導者は鄧小平に移った、と述べる「朱佳木一九九九」。

工作會議の議事日程について、華国鋒は、七九年一月から工作の中心を社会主義現代化建設に移すこととし、主として経済問題について討論することをめざしていた。にもかかわらず、上記日程変更を余儀なくされたのは、一月一二日の東北組における陳雲の發言であった。彼は、経済問題を議論する前に、①薄一波ら六一人叛徒集團案件、②文革中に叛徒とされた事案、③陶铸・王鶴寿らに対する評価、④彭德懷の遺骨を八宝山公墓に収容すること、⑤天安門事件評価、⑥康生の誤りを討論すべきであると主張し、出席者の賛同とともに

に、歴史問題解決にむけた多くの発言を促した。二月十三日に鄧小平が行った工作会議の閉幕詞「解放思想、实事求是、團結一致向前看」は、事実上、三中全会の基調報告となった〔楊繼繩二〇〇八〕。

一月一四日、中共北京市委員会が天安門事件の名誉回復を決定、同日の新華社新聞稿を一六日の『人民日報』と『光明日報』は「天安門事件は完全な革命行動である」との見出しを付けて掲載した。この北京市委の決定については、①政治局常務委員会の批准を得たものであるのか、②『人民日報』『光明日報』の見出しは果して決定を的確に概括したものか、という問題が残されている〔于光遠二〇〇三〕。

一月一七日、『人民日報』は童懷周ら一六人の集団が編集した『天安門詩抄』（一九七六年四月に天安門に貼りだされた詩詞を収録）の前言と一部の詩を掲載、翌一八日には華国鋒が該書の書名を揮毫した〔黎之二〇〇一〕。一九日、北京西単の「民主の壁」に最初の壁新聞がはりだされた。

華国鋒は、一月二五日に政治局常務委員会を代表して天安門事件の名誉回復を宣言、さらに二月一三日の工作会議の閉幕詞において「二つのすべて」に言及して自己批判した〔南東風一九九五、蓋軍一九九八〕。

一月二五日の夜、帰宅した胡耀邦は、「中国人民は今日、苦痛災難から目覚めた。華国鋒は堤防に小さな穴を開けた。歴史の潮流はこれが突破となるであろう。これこそが人民の力というものである。誰がこんなことを予想できたであろう

か」と語ったという〔胡德平二〇〇八②〕。

八、歴史決議と「一正四負」

一九七八年二月一三日の中央工作会議での華国鋒・葉劍英・鄧小平の閉幕スピーチは三人とも劉少奇問題に言及しなかった。一九七九年四月、鄧小平と陳雲の要求により劉少奇案件復査組が発足、九月復査組は「情況報告」を中央に提出した。一九八〇年二月の中共十一期五中全会は、（一）八期十二中全会の決議・関連文献を取り消し劉少奇の名誉を回復する。（二）適当な時期に追悼会を開催する。（三）劉少奇の冤罪に関連するすべての事案を見直し名誉を回復する、と決議した。劉少奇の名誉回復は、毛沢東の文革中の誤りを中共中央が承認したことを意味し、社会思想の混乱が懸念された〔盛平二〇一五〕。

一九七九年一〇月の建国四十周年を記念する葉劍英の演説は、はじめて党が過ちを認めた。それは、自画自賛の空虚なスローガンに終わりを告げ、国が直面する課題に真正面から取り組むための大きな突破口となった。鄧は歴史評価をすすめるために、旗幟鮮明な改革派の胡耀邦を責任者とするとともに、党の正統性擁護を最優先に考える二人の保守派・胡喬木と鄧力群を世話役とするプロジェクトチームを組織した。

〔宋毅軍・任元娜二〇一五〕は、歴史決議の草稿作成過程における陳雲と鄧小平が行ったコメントから、当該文献の内容

を、①毛沢東の歴史的 position の確立、正負の評価、ざっくりとした内容とする、②党の歴史を路線問題として論じない、③建国以前の歴史も視野に入れる (毛沢東評価)、④毛沢東の哲学著作の役割を明示する、⑤華国鋒評価に言及する (それは党主席の交代に帰結した)、と概括する。

この「歴史決議」における華国鋒評価について、「熊松策・胡元二〇一二」は、(1)一九八〇年九月、胡喬木は四人組粉砕以降の四年をどう描くかについての草稿 (六行一〇〇字余) を作成し、省市自治区第一書記座談会に送付した。(2)一〇月、胡は政治局常委の意見をふまえて二〇〇〇字余に改定し、常委各同志に審閲を求めたが、華国鋒が「常委での正式の討論をしないで草稿に付加することに賛成できない」と述べたため、それは公開されなかった。(3)一〇月一二月、四千人討論において四人組粉砕以降の四年の総括を求める意見が多数出された。(4)一一月一二月、九回の政治局会議を開催し華国鋒批判と党主席交代が決定された (ここに至って、胡喬木は四人組粉砕後四年の記述を決議案に挿入した) と述べる。こうして「歴史決議」における華国鋒評価 (一正四負) が確定した。

九. 歴史の紡ぎ方 (付論)

郭德宏・中共中央党校教授は、今日の中国には三種類の中共党史が存在すると言う。すなわちオフィシャルな中共党史、

学者の中共党史、民間の中共党史である。オフィシャルな中共党史は中共の観点から研究と叙述を行い、政治性・奉仕性・教育性が強調される。学者が行う中共党史の多くは、客観的な観点で研究を行い、科学性・リアリティ・学術性が強調される。またいわゆる民間の中共党史は自由に研究し叙述され、個人的関心から研究を行い研究と言論の自由が強調される、とする。郭は、(1)どのカテゴリーに属するものであっても、政治性を考慮に入れず、党の決議や路線・方針・政策に背くものは公表できないし、たとえ発表できたとしても好ましくない影響をもたらすであろう。(2) 科学性を軽視すれば根本的に拠って立つ場が存在せず、だれも信用しないであろう、と述べる [郭德宏二〇〇二・一三]。

「李海文二〇一五」は、オフィシャルな中共党史研究者の立ち位置からあるべき歴史叙述を論じている。彼女は華国鋒回想録をまとめるため一九九八年に一〇回の聞き取りを行ったものの、後に歴史著作の執筆に変更、『歴史転折中の華国鋒』(未見) を上梓した。該書の執筆方針を、(1) 史を以て論じ真相を求める。(2) できる限り資料を集め、偽を廃して真実を残し、粗を去りて精をとる。(3) 同時代人は同時代史を書くことは可能である (歴史はディテールが必要であり、ディテールが真実を決定する)。(4) 矛盾する双方を叙述する [「尊称・蔑称を用いない」]。(5) 今日の青年が読んで理解できることとした。その際、党史専攻と歴史学専攻の違いは、(3) におけるディテールの描き方にあると述べ、中国の党

史専攻（政治理論）にあつては、これまで旧ソ連の『ソ連共産党（ボ）党史教程』の思路と風格がモデルとされてきた、という「二五―三〇」。

黄如軍・中共中央党史研究室主任は、民間の作家・葉永烈『一九七八中国命運大転折』（一九九三上海社会科学出版社）に対する論評を行つてゐる。すなわち、（１）該書の主たる内容は歴史事実に合致しているものの、ディテールにおける資料吟味の粗さが散見される。（２）口述資料を用いる場合、档案文献や報刊資料による検証が必要である。このほか、（３）作家の歴史感覚に由来する心理分析や描写をどのように捉え、また想像と虚構を如何に排除するかという問題が存在する、と論じる「黄如軍一九九八」。

一〇. 中国政治の転換と農業問題（付論）

趙樹凱・國務院發展研究主任は、十一期三中全会前後の農業問題にかかわる構図について、安徽省委員会書記として包産到戸にむかう農村改革を探つていた万里、副総理として農業を主管していた紀登奎、毛沢東の「農業は大寨に学ぶ」方針によって全国の模範となった陳永貴・副総理の三人の指導者の見解の相違として整理する。すなわち、（１）農業改革の起源について、万里は、①「農業は大寨に学ぶ」の枠組みの突破、②「生産隊を基礎とする三級所有」の突破（聯産計酬・包産到組の実施）、③「不許包産到戸」の突破（家庭聯

産承包責任制）農民の自主権獲得」を構想していた。（２）大寨モデルは、農民の政治動員、階級闘争と社会主義（階級敵＝資本主義のしっぽ）を強調し、自留地廃止（定額包工・聯産計酬に反対）を主張していた。（３）十一期三中全会の段階で紀登奎が構想していたのは、人民公社の集中管理の方向であつた。（４）紀登奎のスタンスは、積極的に混乱是正を志向する万里とも、左傾政策を堅持・強化しようとする陳永貴・華国鋒とも異なる中間的思路であつた「趙樹凱二〇一五」。

「歴史決議」を採択した中共十一期六中全会前夜、陳永貴は副総理を辞任した「顧育豹二〇〇七」。

まとめ

一九七六年九月九日、毛沢東が死去した。一〇月八日、中央・人大常委・國務院・軍委「記念堂建設についての決定」がなされ、一周忌にあたる七七年九月九日に落成式典が挙行された。この毛沢東記念堂建設は、党政軍三権を収攬する華国鋒が最初に手掛けた一大事業であつた。毛沢東の遺体を風景秀麗の地に石碑をたてて埋葬するのではなく、記念堂は「生きている人と同じく屋内に安置すること。人民のなかにあり、人々が常に彼を見ることができるようになる」かたちで天安門広場の南端に建設された。一九八〇年八月、鄧小平はイタリア人記者に対して、①記念堂建設は生前の毛沢東の意思に

反する、②しかしそれは国内の安定を求めて建設された、③今日これを撤去することは妥当ではないと述べた。華国鋒は、毛沢東の誕生日と命日の記念堂での拝謁を習慣としていた〔張凱一九九三、孟昭庚二〇一〇〕。

最近、山西交城に広大な華国鋒の陵墓が造られたという。資金は北京が出し、一部は地方政府が自ら調達したという。面積は一〇ヘクタールで一四のサッカー場に相当し、山の斜面に三六五段の石段を配し、明らかに中山陵を模している〔陳丹晨二〇一五・四〇〕。

〔楊宏雨・周瑞瑞二〇一四〕は、華国鋒が一九八二年の中共十二全大会で中央政治局に残らなかったことについて、①世代論と華国鋒の権威（毛晩年）四人組粉碎後の老幹部復活）、②「一正四負」評価（韓鋼「一正は軽すぎ、四負は事実と異なる武断的評価」）、③毛沢東晩年の誤り（華国鋒はもともと彼が担う必要のない責任に対する代価を払った）とし、当時、辞職に対する疑義が葉劍英・胡耀邦・趙紫陽や地方・軍幹部に存在したとする。その上で、華国鋒は過渡時期に比較的適合した政治領袖として他に代替しえない役割を果たした、と概括する。

また「李海文二〇一五」は、「四人組」粉碎から四〇年近くたったが、この間の中国には巨大な変化があったとして、次のように述べる。（１）「四人組」を粉碎して十年の動乱が終わった。（２）政治突出・政治第一・政治運動重視から経済建設を党工作の重点とし、改革開放を実行した。（３）計

画経済から市場経済に転換した。（４）執政党が労働者階級の前衛から各階級の先進分子の集合体になつた〔三〇〕。

中国における華国鋒研究は、一九八一年「歴史決議」の「一正四負」に拠るものから、二〇〇八年の「華国鋒同志生平」を契機にイデオロギー的バイアスを排した評価に転じた。さらに一〇年を経た現在、一九七〇年代後半から八〇年代初めの中国政治の転換において何が変わり何が変わらなかったのかについて、四〇年後の今日の立ち位置から総合的な検討と検証が求められる。華国鋒とその政権が果たした役割についての考察が、この課題における重要な一部であることは多言を要しない。

参考文献

- 陳丹晨二〇一五「写歴史要経得起事実檢驗」『炎黄春秋』二〇一五年第九期
陳立旭二〇一四「華国鋒主持党的三次重要會議」『湘潮』二〇一四年第一〇期
程冠軍二〇一六「習仲勳章為何在一九七八年中央工作會議上被贊揚」『同舟共進』二〇一六年第六期
程美東二〇〇八「一九七六—一九七八年中国社会的演化…兼論華国鋒時期政治環境的变化與十一屆三中全會的召開」『學習與探索』二〇〇八年第六期（一七九期）
程中原二〇〇四「一九七五…鄧小平主持各方面的整頓」『当代中国』

史研究」二〇〇四年第二期

程中原二〇〇九「關於華國鋒的評價問題」『晉陽學刊』二〇〇九年第五期

程中原二〇〇九②「一部評價述十一屆三中全會的信史：簡評朱佳木新作《我所知道的十一屆三中全會》」『當代中國史研究』二〇〇九年第一期

程中原二〇一一「九〇年歷程中的一次重大轉機：論兩種中國命運挑戰的一九七六年」『甘肅社會科學』二〇一一年第三期

丁曉平二〇一二「胡喬木在一九七六」『領導文萃』二〇一二年第八期

蓋軍一九九八「十一屆三中全會的歷史背景和意義」『理論學刊』一九九八年第六期

龔育之二〇〇七「十一大是一次不成功的黨代會」『共產黨員』二〇〇七年第八期

顧育豹二〇〇七「鄧小平與陳永貴的交鋒」『共產黨員：下半月』二〇〇七年第九期

郭德宏二〇〇二「十一屆三中全會以來中共黨史學理論和方法的新進展」『黨史研究與教學』二〇〇二年第二期

何云一九九八「真理標準與『兩個凡是』交鋒紀實」『政府法制』一九九八年第七期

江燕二〇〇八「粉碎『四人幫』問題研究述評」『中共黨史資料』二〇〇八年第三期

姜毅然·震飛二〇〇七「吳德的風雨人生」『黨史博采·紀實版』二〇〇七年第一期

韓鋼二〇〇九「『兩個凡是』的由來及其終結」『中共黨史研究』二〇〇九年第一期

韓鋼二〇一一「關於華國鋒的若干史實」『炎黃春秋』二〇一一年第二期

韓鋼二〇一一②「關於華國鋒的若干史實（續）」『炎黃春秋』二〇一一年第三期

韓鋼二〇一一③「和華國鋒有關的幾樁史實」『各界』二〇一一年第四期（一九〇期）

韓鋼二〇一二「粉碎『四人幫』：歷史真相與未解之謎」『共產黨員：上半月』二〇一二年第一期（原載：『北京日報』）

韓鋼二〇一二②「對華國鋒評價的爭議從何而來」『現代領導』二〇一二年第五期

胡德平二〇〇八「華國鋒在『真理標準』討論中」『共產黨員：上半月』二〇〇八年第八期

胡德平二〇〇八②（李從淵摘）「華國鋒在『真理標準』討論中」『黨史文苑·紀實版』二〇〇八年第一〇期

黃如軍一九九八「關於黨史、國史重大題材紀實作品的幾點思考」兼評葉永烈著《一九七八中國命運大轉折》『中共黨史研究』一九九八年第四期

李安亮二〇〇二「鄧小平與第二代中央領導集體的形成立」『黨史博采·紀實版』二〇〇二年第九期

理查德·伊文思一九九七「鄧小平拒絕接受『兩個凡是』」『領導文萃』一九九七年第七期

李海文二〇一五「《歷史轉折中的華國鋒》寫作始末」『江淮文史』二〇一五年第五期

李海文二〇一六「天安門事件的前前後後（上）」『江淮文史』二〇一六年第三期

李海文二〇一六②「天安門事件的前前後後（中）」『江淮文史』二〇一六年第四期

李海文二〇一六③「天安門事件的前前後後（下）」『江淮文史』二〇一六年第五期

李園園二〇一四「揭秘：華國鋒隱退內情」『紅土地』二〇一四年第

一〇期

李正華二〇一〇「一九七八年國務院務虛會研究」『當代中國史研究』

二〇一〇年第二期

黎之二〇〇一「回憶與思考：《天安門詩抄》出版前後」『新文學史料』

二〇〇一年第二期

馬立誠・凌志軍二〇一四「陳雲發言改變了十一屆三中全會議程」『共產黨員（河北）』二〇一四年第四期

孟昭庚二〇一〇「毛主席紀念堂落成始末」『黨史博采・紀實版』

二〇一〇年第一期

孟昭庚二〇一〇「華國鋒在一九七六—一九七八年」『紅広角』

二〇一一年第九期

南東風一九九五「文革」後同「兩個凡是」的那場鬭爭」『炎黃春秋』

一九九五年第六期

盛平二〇一五「胡耀邦促成劉少奇冤案平反」『國家人文歷史』

二〇一五年第八期

師東兵二〇〇八（摘）「全國掀起真理標準討論熱潮」『公民導刊』

二〇〇八年第四期

宋毅軍・任元娜二〇一五「陳雲和鄧小平與《關於建國以來黨的若干歷史問題決議》」『黨史文苑・紀實版』二〇一五年第七期

孫大力一九九〇「關於撥亂反正的歷史回顧」『黨史研究與教學』

一九九〇年第四期

湯應武一九九八「鄧小平「核心」地位的形成」『今日浙江』

一九九八年第八期

王東二〇〇八「有關真理標準大討論研究的幾個重要問題」『資料信息』

二〇〇八年第七期

王彥君二〇一六「馬文瑞在十一屆三中全會前後」『炎黃春秋』

二〇一六年三期

吳德二〇〇四（朱元石整理）「一九七六年天安門事件的前前後後」『全

國新書目』二〇〇四年第五期

吳光祥二〇〇八「鄧小平提出「完整地準確地理解毛澤東思想」前後」『世紀橋』二〇〇八年第四S期

新華社二〇〇八「華國鋒同志生平」『人民日報』二〇〇八年九月一日

熊蕾二〇〇八「一九七六・華國鋒和葉劍英結盟內幕」（上）、『各界』

二〇〇八年第一期

熊松策・胡元二〇一二「告別「文革」……歷史決議」『是如煉成的？』

二〇一二年第七期

徐慶全二〇〇八「軋折年代的文学與政治」『粵海風』二〇〇八年第六期

徐慶全二〇一五「撥亂反正的先聲……胡耀邦在中央黨校」（上）『湘潮』

二〇一五年第三期

徐慶全二〇一五②「撥亂反正的先聲……胡耀邦在中央黨校」（下）『湘潮』

二〇一五年第四期

徐慶全二〇一六「你弁事，我放心」的若干史實」『炎黃春秋』

二〇一六年第六期

楊繼繩二〇〇八「一九七八年、歷時三十六天的中央工作會議」『共產黨員』二〇〇八年第四期

楊建成一九九八「世紀性的貢獻……論葉劍英與十一屆三中全會」『紅広角』一九九八年第五期

楊宏雨・周瑞瑞二〇一四「中共十一大平議」『哈爾濱師範大學社會科學學報』二〇一四年第二期

楊以謙一九九三「正確評價歷史人物的光輝典範」『理論建設』

一九九三年第五期

于光遠一九九八「歷史大軋折的兩個會議」『天涯』一九九八年第六期

于光遠二〇〇〇「我印象中的胡耀邦與華國鋒」『世紀行』二〇〇〇

年第二二期

于光遠二〇〇三「天安門事件平反真相」『領導文萃』二〇〇三年第四期

于光遠二〇〇八「胡耀邦在一九七八年中央工作會議上」『共產黨員』

二〇〇八年第四期

余煥椿二〇一五「《人民日報》在撥亂反正中」『炎黃春秋』二〇一五年第六期

張德成一九九二「關於真理標準問題的討論始末」『中共黨史研究』

一九九二年第三期

張根生二〇〇八「聽華國鋒談幾件大事」『炎黃春秋』二〇〇八年第一〇期

一〇期

張凱一九九三「華國鋒欽定」毛主席紀念堂設計方案」『炎黃春秋』

一九九三年第九期

趙樹凱二〇一五「農業學大寨」的一段歷史」『中國發展觀察』

二〇一五年第八期

鄭惠一九九一「開創自己的革命和建設道路…談談編寫《中國共產黨的七十年》的指導思想」『黨建』一九九一年第二二期

朱佳木一九九五「胡喬木同志與黨的十一屆三中全會」『黨史博采』

紀實版』一九九五年第三期

朱佳木一九九九「十一屆三中全會及其主要文件形成的若干情況…我所知道的十一屆三中全會」（下）『黨的文獻』一九九九年第一期

（中國南開大學·歷史學院）